

お茶の芽出し肥に千代田化成 夏場の生育も充分確保



今回ご出演いただいた鈴木さんは、埼玉県三芳町の「三富新田(右の写真)」と呼ばれている地域にお住まいで、お茶、野菜を合わせて6ヘクタール栽培されています。ご自宅の敷地内にすべての畑があり、また、お茶も野菜もほとんどすべて地元で販売されています。作物に対する千代田化成の効果や、栽培に対する思いをお伺いしました。



■埼玉県指定文化財 『三富新田』

江戸時代に開拓された『三富新田(さんともしんでん)』は、街道の両側に畑と雑木林の面積が均等になるよう『短冊形』の区画を並べた、とても珍しい地域です。
「お茶畑、野菜畑、それから雑木林がすべて自宅の敷地内にあります。今でもこの地域では雑木林の落葉を堆肥にして畑に施す『循環型農業』が受け継がれています。」
自宅の敷地内にすべての畑があるという事は、他の地域の生産者の方からすれば、とても羨ましいことではないでしょうか。
「生まれてから当たり前のように育った土地なので、あまりピンとこないのですが、確かに機械の移動は楽だと思います。トラックに載せて運ぶことはまずありませんから。ただ一番の利点は、井戸水の配管がすべての畑に設置されていることです。何を作るにしても水がすぐに出せるという事は、とても大きな利点だと思っています。」

■『芽出し肥』の千代田化成で 夏場の生育確保

「お茶の栽培を始めておよそ25年になります。千代田化成を使うようになってからは、およそ20年です。入間市の(株)坂宗さんの紹介で使い始めました。」
鈴木さんはお茶を約3ヘクタール、野菜も約3ヘクタール栽培されています。
お茶はご自宅で製茶までされており、これまで六回『農林水産大臣賞』を受賞されています。
「3月に苦土と石灰、それから『春肥』として有機入り化成を施肥します。その後、一番茶摘採前の4月と、二番茶摘採前の5月下旬に、一番茶・二番茶の『芽出し肥』として、千代田化成を施肥します。施肥量は10アール当り50キロから60キロです。」



一番茶前に『芽出し肥』として施用された千代田化成

■高品質を維持するため 一年通して手は抜かない

「当園で製造したお茶は、近隣のスーパーさん、JAさんの直売所、それから自宅で販売しています。」
現在、全国的にお茶の価格は低迷していると聞かれています。その影響はないのでしょうか。
「自園で製造販売している利点として、相場に左右され難いということがあります。でもそれに甘えることなく、一年通して決して手を抜かずに、品質の高いものが作れるように心がけています。」



乗用刈取り機での秋整枝作業

鈴木さんはこのあと10月の『秋肥(有機配合肥料)』まで、施肥しないのだそうです。夏場の生育は確保されているのでしょうか。
「一番茶・二番茶の芽の伸びはもちろんですが、二番茶摘採後の伸びも非常に良く、夏場の生育は十分に確保されています。」
「夏場の芽の伸び具合を見たお仲間から『こんなに伸びるの!』と驚かれます。」
「以前、芽出し肥に千代田化成を使わなかったことがありました。その時は、特に二番茶の葉の色乗りがいつもより遅く、それに一番茶、二番茶とも製茶するときに、千代田化成を使った葉に比べて明らかに乾き方が速かったです。この時は本当に千代田化成の効果・実力を感じました。」



9月中旬の様子。写っている人物の身長は約180cm

■「夢は叶いました。 あとは・・・。」

お茶に野菜にと、一年中休む間もない鈴木さん。「夢』は何ですか?」
「夢はもう叶ってしまったんです。お茶で一度賞を取りたいと思っていましたが、(株)坂宗さんのおかげで取らせてもらい、それで母への恩返しができました。」
「その時には家族から笑顔ももらえなかった。それを夢が叶ったと言うのはおかしな話かもしれないけど。」
この先は?
「後継者が育ってくれればいいなと思っています。地域もそうだし個人的にもそうです。我が家は娘三人なので、いい跡取りが見つかってくれればありがたいと、それが夢です。」
もう一つの夢、必ず叶いますように。鈴木さん、ありがとうございます。



『三富新田』は江戸時代元禄年間に、時の川越藩主柳沢吉保公の指示で開墾されました。その時に入植者の菩提寺として創建されたのが鈴木園様からもほど近い『多福寺』です。寺院内には多くの文化財が残されています。